HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	UNGEHEUER　のコミュニケーション理論
Author(s)	小川, 了
Citation	独語独文学研究年報, 27, 25-38
Issue Date	2000-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26126
Type	departmental bulletin paper
File Information	27_P25-38.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

G. UNGEHEUER のコミュニケーション理論

小川　了

1　Gerold Ungeheuer (1930-1982) の思想は、彼の早すぎる死によって、最終的にまとまった形をとることがついになかった[1]。彼は、数多く発表した決して読みやすいとは言えない論文を通して、新しいコミュニケーションモデルの構築を試みていた。彼が目指していたのは、印象を重視するコミュニケーションモデル Eindrucksmodell der Kommunikation だった[2]。そのモデルで彼が乗り越えようとしていたのは、表現重視のモデル Ausdrucksmodell der Kommunikation である。このモデルでは、話し手と彼の為した表現が考察の中心となり、聞き手は話し手の発する表現の単なる受け手としてのみ位置付けられることになる。コミュニケーションに関する日常生活における言説や研究者の伝統的なコミュニケーション理論の背景に広く浸透しているのがこのモデルである。しかし聞き手の能動的な活動を問うことのできないこのアンバランスなモデルに Ungeheuer は満足できず、その対案として印象重視のコミュニケーションモデルを提案したのだ。彼が提案しているこの印象重視のモデルでは明らかに、

> 聞き手が前面に出てくるし、また少なくとも彼が行なうコミュニケーション活動の点では話し手と同等に扱われなくてはならない。というのもこのモデルにおいては、話し手のコミュニケーション行為は、彼が聞き手とともに、あるいは聞き手の中に、あるいは聞き手に対して、ある「印象」を呼び起こすことによって為されるからである。この「印象」が生じうるのはしかし、聞き手が、話し手によって呼び起こされたものを自らの活動によって自分の「印象」へと変えた場合だけである。したがって、この最初の段階からしてすでに、社会行為としてのコミュニケーションがずっと保持されているであり、それは、あたかも自然に、話し手と聞き手の部分的な行為へ分かれるのではない。
>
> (Ungeheuer　1987 年、294-295 頁)

これは Ungeheuer が最後に書いた「発話、伝達、理解に関する前-判断」からの引用だが、同じ論文の中で彼は自分のコミュニケーション理論が前提としている三つの基本的な仮定を挙げている (Ungeheuer　1987 年、300-301 頁)。すなわち、コミュニケーション経験を記述するには人間について述べることが不可欠で (人間学的観点)、このとき少なくとも二人の人間が一緒にひとつの用件で活動しており (社会学的観点)、コミュニケーションにおいては比較的固定的な規則体系に準拠して記号が使用される (記号論的観点)、というのである。

2　人間学的な思索の土台となるのは「経験 Erfahrung」で、Ungeheuer によると、人間は常に何かを経験している者、別言すると、何一つ経験しないでいることができない者として解さ

れている。さらに人間の経験の特性を彼は次の五つの用語で規定している。それによると人間の経験は、まず、同一の事柄が反復して経験されうるということから、経験営為 **Erfahrungsakt** と経験内容 **Erfahrungsinhalt** が区別して考えられなくてはならない[3] という意味で「包括的 **comprehensiv**」であり、経験営為が自分の経験の経験内容になりうるという点では「再帰的 **reflexiv**」である。また、人間の経験は、外的経験（場所、時間、数に関して同定できる事物や事態を感覚知覚に基づいて自分の外部にあるものとして経験すること）と内的経験（感覚や感情、思考や記憶などの、経験している本人にしか立ち入ることができない内的領域での経験）に区別できるという点で「二元的 **dichotom**」だとされる。しかし、外的経験であっても、その経験の過程は常に内的経験に属する[4] ので、人間の経験はすべて「個人的 **individuell**」だとされる。最後に、人間の（過去から現在に至る）経験は、絶えず構築と解体を繰り返しながらも可能な限り整合性をもった総体を形作り、科学理論と同様、経験を説明する機能をもっているという点で「理論的 **theoretisch**」である[5] と **Ungeheuer** は述べている。

こうした人間の経験に関する規定を通して、**Ungeheuer** は自分のコミュニケーション理論の核となるふたつの概念を引き出している。それはコミュニケーションの動因と限界の契機となるもので、一方は「内-外-二元関係 **Innen-Außen-Dichotomie**」、他方は「個人的世界理論 **individuelle Welttheorie**[6]」の名で呼ばれている。すなわち、ある人Ａにとって他者Ｂは外的経験の対象とはなりえても、ＡはＢの内的領域には決して立ち入ることができない（これが内-外-二元関係である）。Ｂの内的経験（すなわち、あらゆる経験の経験内容）を直接知りうるのはＢ本人だけである。そういう意味で、人間と人間の間には取り除くことも克服されることもない溝があり、このことがコミュニケーションの動因となる。だが、この溝の媒介となるコミュニケーションにおけるＡとＢの発話と理解は、どちらも双方の個人的世界理論に基づいてのみ為されるので、両者のコミュニケーションが成功したかどうかの確認は最終的には困難だというわけだ。

3　人間の経験という視点からコミュニケーションを社会的な行為として位置付けるために、**Ungeheuer** は経験の様態を（常にそれが截然と分けられている訳ではないとしながらも）ふたつに区分している。一方は「囲圧的 **koërzitiv**」経験と呼ばれ、もう一方は「所求的 **quaesitiv**」経験と呼ばれている。囲圧的経験とは、往来の喧騒、夜の暗さ、暑さ寒さ、喜びや悲しみや痛みなどといった、人間の意志とは関わりなく強いられ押し付けられる経験であり、これに対して所求的経験と名づけられているのは、おいしい食事を楽しむとか風呂で疲れを癒したりお化け屋敷で怖がったりするといった、はっきりとそうしたいという意図をもって為される経験のことである[7]。**Ungeheuer** のコミュニケーション理論にとって重要なのは、所求的経験である。意図的に何かを経験しようとする者は、経験に先立って、自分の求める経験を予想し、それを目標と定め、個人的世界理論に基づいて実現の可能性や実行のための手段について仮定して、「行為する」。

人間は自身で何かを経験したいと求めることもあるが、他方、自分以外の人に何かを経験させたいとも思う。つまり、意図した所求的経験の目標が他者の経験だという場合がある。例えば、狭い歩道をふさぐように並んで歩いているアベックの後方から来た人が、彼らに道を開けさせたいと思う場合、その人には二つのやり方があるだろう。強引に二人の間に分け入って自分の通る

スペースを開けるか、そうでなければ「すみませんが、通してもらえますかね」などと頼むだろう。ここではある行為（前方の二人の間に割り込むとか、依頼の言葉を発する）の目標が、他者の行為（道を空ける）を引き起こすことに置かれている。どちらのやり方をとるにせよ、最初の行為は他者になんらかの行為を引き起こすだろう。こうした事態を Ungeheuer は「相互交渉 Interaktion[8]」と呼んでいる。前者が直接的な相互交渉だとすると、後者は依頼の言葉によって媒介されているので間接的な相互交渉ということになる。Ungeheuer にとって、コミュニケーションとは常に間接的な相互交渉なのである。

> 発話し聴取する個人たちは行為している。彼らはコミュニケーションの意図をもって、双方が双方に対して応じる構えでいるので、私は彼らの相互交渉を「共同行為 Gemeinschaftshandlung」（または、「社会的行為 soziale Handlung」あるいは「社会行為 Sozialhandlung」）という概念で捉えている。　（Ungeheuer　1974 年、37 頁）

先に挙げた例では、「道を開けてもらうこと」が目標となっていた。そのために依頼の言葉を発し、前にいるアベックが道を開けてくれれば目標は達成されたことになる。このとき、言語コミュニケーションは、Ungeheuer によると、他者に外的経験を行なわせる（道を開けさせる）という「より上位の übergeordnet」共同行為の目標に「従属する untergeordnet」行為目標をもつ共同行為だとされる。つまり言語コミュニケーションは、それ自体が共同行為であると同時に、より上位の共同行為の基礎を成すという二重性をもっているのである。

> 人間が何かを所求的に経験する場合、それは外的経験か内的経験かのどちらかである。その意図が内的経験を目指しているなら、その意図を実現できるのは、その意図を取り込んで遂行するよう求められている人だけである。コミュニケーションとは、聞き手に特定の内的経験、つまり理解する Verstehen という経験を遂行させようと意図している話し手主催の行事 Veranstaltungen[9] なのである。　（Ungeheuer　1987 年、315-316 頁）

したがって「すみませんが、通してもらえますかね」という発話は、それを聞いた相手の（道を開けるという）行為と直結しているのではない[10]。両者は異なる次元に属する行為なのである。話し手の発話の目標は、（実際の行為以前に）聞き手の理解という内的経験に置かれており、この理解という経験は聞き手の内的行為である。さらに、話し手のそうした意図もまた、彼の内的経験であり、内的行為である。話し手の意図も聞き手の理解も共に個人的世界理論に基づく内的行為であり、ふたりの間には内-外-二元関係という克服できない溝があるので、彼らが相互交渉を成功させるためには、同一のものとして双方が経験しうる外的経験を媒介手段として使うしか手がないことになる。その媒介手段となるのが記号であり、記号の中でも最も広く採られているものは言語である。「こういう意味で、話し手の言語定記 sprachliche Forumlierung[11] は、つまり個々の言語記号は、内的な経験営為を遂行せよという、聞き手に対する*プラン*であり *指図 Plan* und *Anweisung* である（Ungeheuer　1987 年、316 頁）〔*強調*は Ungeheuer による〕」。

日常生活の場面としては、依頼の言葉を発して、それを聞いた相手が何かをしてくれれば、コミュニケーションは成功したと考えるだろう。相手の行為を見て、自分の発話の真意は相手に伝わったとみなしているのだ。つまり、より上位の共同行為の行為目標の達成がコミュニケーション行為の行為目標の達成を信じるための安心材料[12]として解されているのだ。

しかし言語コミュニケーションを行なう際、常にそうした安心材料があるわけではない。より上位の社会行為を伴わないような場面を想像するのはたやすい。例えば、ある人が友人の悩みの相談を受けている場合、彼らのコミュニケーションの成否は上位の社会行為によって保障されることは（少なくともその場では）ほとんどないだろう。ここから、コミュニケーションパートナーの二人が「友人であること」とか、また、そのコミュニケーションが「対面的なコミュニケーション **face-to-face-Kommunikation**」であるといった（安心材料になりうる）条件を取り除いた状況も想定できる。例えば、ラジオ番組などで聴取者が電話でパーソナリティーに人生相談をもちかけるような場面である。しかし、そのパーソナリティーが番組のレギュラーメンバーであることや電話をしてきた相談者がその番組をいつも聞いている人であるといった要素も何らかの安心材料になりうるかもしれない。同じ電話相談であっても、「いのちの電話」といった公的な機関で行なわれる人生相談の場合には、まったく初めて言葉を交わす二人の人間のコミュニケーションの場面も多くあることだろう。こうしてコミュニケーションの成功の安心材料となる要素を取り除いていくと、二人のコミュニケーションパートナーと彼らを媒介する言語だけが残る。

> 発話や伝達、理解が、こういう意味で、それらを取り巻く活動や経験から十分に独立して行なわれうるような社会行為のことを、私は原基コミュニケーション **kruziale Kommunikation** と呼ぶ。　　（**Ungeheuer**　1987 年、321 頁〔*強調*は Ungeheuer による〕）

安心材料による成功の確信が得られない原基コミュニケーションは最も基本的なコミュニケーションの姿であり、**Ungeheuer** のコミュニケーションモデルはこの地点で構想されている。話し手は、聞き手に行なわせたい内的経験を予想し、それを目標として先取りし、その目標達成に適う言語定記を自分の個人的世界理論に照らして探し出し、そして、自分が目標として先取りした内的経験営為を行なえという指図である言語定記を実際に発話する。聞き手は、話し手に与えられた言語定記から、話し手が先取りしていた（自分に求められている）内的営為の行為プランを再構成し、これまでの思考の道筋やこれからの展開の予想などについて自分の世界理論に照らして整合性をもたせるよう試みる。このとき、両者が協調的な姿勢でそれぞれの内的行為を行ない、言語を媒介として「疎通 **Verständigung**」に達することがコミュニケーションの目標である。しかし話し手と聞き手は内-外-二元関係にあるので、互いの世界理論を参照することは決してできない。両者は互いにそれぞれの内的な領域に関しては推定しあうしか手がないのである。話し手は聞き手に行なわせたい内的経験を先取りする際、聞き手にそれができるかどうかといったことに関して聞き手の内的領域を推定しているのであり、聞き手は聞き手で、話し手がどういう意図でその言語定記をしたのかということに関して話し手の内的領域を推定している。したがって、**Ungeheuer** にとって「コミュニケーションの成功という点では、コミュニケーション社

会行為は誤まり易い fallibel ものである（Ungeheuer　1987 年、320 頁）」。

4　言語に関して、ある言語共同体の成員は、例えば文字の形とか、音声上の特徴や統語的な規則などといった知覚的に捉えることができる外的な事柄に関しては一定の雛型を共有している。言語記号は超個人的に秩序付けられた体系を成していると言える。そして、人間が母国語を習得する過程では、こうした体系的秩序とともに、言葉と指示対象あるいは概念との結びつきも獲得される。例えば「コップ」という語は、実際に使用されている目の前の容器とも結びつき、あるいは「飲み物を入れる円筒形の容器」などといった言葉による概念規定とも結びつく。いずれにせよ、言語の習得過程で、特定の語と事物（あるいは定義）との結びつきを同一の経験内容として反復的に経験することで、人間はその語の語義を自分の中に固着させていく。そしてこの語義は他者と共有可能で確定的な意味であるかのように見えるし、それを疑ってかかる必要のある場面は日常生活ではあまりないのかもしれない。だが Ungeheuer に言わせると、語義は事物のことではないし、概念と同一のことでもない。それは（概念も含めた）「知識の内容 Inhalte des Wissens（Ungeheuer　1987 年、325 頁）」だというのである。つまり、言語体系の知覚的に捉えることができる外的な要素に対して、言葉の意味は個人的世界理論の反映だということだ。これは「コップ」という語がコミュニケーションにおいて通じるとか通じないという問題ではない。その語が（誰の目にも自明の語として姿を現わすのではなく）個人的世界理論に応じて、目前の対象や概念を越えた聞き手には知覚できない「知識の内容」を常に背負っているということである。「話し手は、理解のために必要とされる、自分の思想や知識の背景を成している要素や条件すべてを外的行為として産出できるわけではないのだ（J.G.Juchem　1987 年、10 頁）」。したがって、コミュニケーションにおいて話し手の言語定記の内容を、聞き手が字義通りの意味だと信じている水準で理解しただけでは十分とは言えない。Ungeheuer が「原基コミュニケーションにおける言語定記は常に省略的 elliptisch である（Ungeheuer　1987 年、327 頁）」と言うのはこういう意味であって、（「それは誰の本なの？」と聞かれて「山田さんのです」と答えた場合、返答の表現は「これは山田さんの本です」という文を省略したものとみなすことができるが、この例のように）その気になれば後から要素を補うことで完全な形にすることができるという意味での省略のことではない。文法的に完全な形の文を作ったとしても、それは Ungeheuer の言う意味では常に省略的にならざるをえないのだ。

省略的にならざるをえない言語定記はコミュニケーションの当事者たちにとっては常に役不足であり、またそれを補ってくれる上位の行為目標の達成などの安心材料もないので、原基コミュニケーションにおいてコミュニケーションの成功を確認する場合、その確認作業自体が再びコミュニケーションの形をとることになる。学会発表などでの質疑応答の場面が典型的な例かもしれない。話し手が聞き手の反応から聞き手の理解を十分ではないと感じる場合や、聞き手が話し手の言ったことに対する自分の理解は不十分だと感じる場合、話し手（の役割にまわった人）は当該の言語定記をパラフレーズ Paraphrase して相手の理解の達成を確認することができる。ここで重要なことは、ある言語定記に対してそのパラフレーズとしての言語定記が新しい語彙と新しい統語構造で言い換えられて与えられることになるけれど、それが最初の言語定記と同じ目標を

もっているという点である。「別の言い方をすると、これは～ということです」とか「あなたがさっきおっしゃった～とは、つまり･･･のことですね？」などといった、パラフレーズであることを合図する表現が伴えば、聞き手は異なるいくつかの言語定記を同じ目標をもった、話し手からの指図として理解しなくてはならない。こうした作業を経て相手の理解が満足いくものかどうかを確認することはできるが、しかし、パラフレーズもまた言語定記に他ならないので、理解が達成されたかどうかは最終的には当事者の決定にゆだねるしかないのである。

5　ここまで確認すると、冒頭で引用した印象重視のコミュニケーションモデルを構想するにあたって、Ungeheuer がどういう言語コミュニケーションを想定していたのかということが見えてくるのではないかと思う。彼のコミュニケーション理論を厳密に適用すると、人間には確実にコミュニケーションを成立させることが原理的には不可能だ、ということになりそうだ。

> ･･･自分たちの理解に関するコミュニケーションパートナーたちの決定は、調整が完全に一致したという証明など行ないようがないのだから、最終的には推測に基づくものなのである。最後の最後には人間は、自分たちが互いに理解し合ったかどうかということを知ることはできないのだ。彼らはそれを知っていると信じているのにすぎないのだ！　主観的には知識 Wissen として現われるこうした信念 Glauben を獲得したら、人間はコミュニケーション過程において妥協に達したことになる。　(J.G.Juchem　1987 年、10-11 頁)

Ungeheuer のコミュニケーション理論は、これを厳格主義だとか懐疑論などと批判する声もあるようだが (J.G.Juchem　1987 年、10 頁)、極めてリアリティーのある主張だと言わざるをえない。というのも、私的な経験を反省してみるだけでも、言いたいことが言葉にならないことは決して珍しいことではないからだ。一人の人間が自由に駆使できる語彙数にはおのずと限界があることを考えると、これを個人的な語彙に関する知識不足の問題として片付けることはできない。適切だと思う表現が見つからないのに言葉にする必要に迫られた場合は、役不足だと思いながらも何か類似の表現で手を打つことになる。表現重視のコミュニケーションモデルでは、こうしたリアリティーは再現できない。送り手がコード化した情報は受け手に転送され、受け手がそれを解読するというモデルでは、送り手の発話以前のそうした内的活動などは問題にならないどころか、コード化できることが自明の前提となっている。しかし自分の言わんとすることを言語に移し替えることは、今見たありきたりの経験から考えただけでも、決して自明のことではないのだ。仮に適切な表現を採用したと送り手が考えていたとしても、それは本人の判断に過ぎず、コミュニケーションにおいてそれが適切な表現として作用するかどうかは別問題である。さらに、この転送モデルにおいて伝達とは、(話し手の言わんとしていたことが聞き手に伝わることではなく) 言語表現が聞き手に転送されることである。このモデルはそもそもコミュニケーションは成功するものだとして構想されているのだから、言語表現には話し手と聞き手の間で共有可能な意味の存在がやはり自明の前提となっている。つまり、言語表現が伝達されれば、話し手の言わんとしていたことも同時に伝わるという楽観的な発想である[13]。この楽観主義のもとでは、コミ

ュニケーションに関わっている送り手と受け手は均質なファクターとして扱われることになる。というのも彼らが均質な存在でなければ、意味の共有が保障されないからだ。いずれにしてもこのモデルは、人間のコミュニケーション行為に応用するには、捨象している事柄が多すぎるのだ。

Ungeheuer のコミュニケーションモデルが „Eindruck“ という語を使用しているのは、まさに „Ausdruck“ 重視のモデルが捨て去ったリアリティーを取り戻すためだとも言えるだろう。本論冒頭の引用では「印象」という訳語を当てたが、Ungeheuer が „Ausdruck“ という語の「表出・表現」という内容とパラレルな形で、„Eindruck“ という語に「刻印」及び「(刻印によってできた) 痕跡」という内容を託して使用しているのは今や明白だろう。

モデルの転換によってまず最初に変更されるのは、話し手が言わんとすることのコード化、すなわち「表出」の自明性である。コミュニケーションにおいて話し手は、自分の言いたいことをそっくりそのまま言語を使って表現できるわけではない。言語は彼のためだけにあるのではないのだ。原理的には省略的にならざるをえないし、また聞き手の解釈ひとつで話し手が想定していた以上の内容をもつかもしれない。彼は自分が望む聞き手の内的経験営為を目標として先取りして、それが遂行されうるような言語定記を、手持ちの言語を駆使して作り出す。これは言語の形として何かを表出しているというよりは、(比喩的にならざるをえないが) 聞き手に気づいてもらいたい印を言葉に刻み込んでいると言った方が適切ではないだろうか。話し手は (聞き手の内的領域に想定している) 目標を言葉に刻印し、その痕跡がプランや指図としての言語定記ということになる。言語定記は単なる (文法的な規則で解読されるだけの) 言語表現ではなく、話し手から聞き手へ向けられたプランや指図の痕跡を残した、文法的な水準以上の扱いを求める言葉なのである。ところが、刻印の作業も、その結果としての痕跡も、聞き手にとっては残念ながら言語定記から直接的には知覚できない事柄なのだ。聞き手にできることは、知覚可能な言語定記それ自体から、話し手の刻印した痕跡を推定することだけである。コミュニケーションを少しでも有効なものにしようと思うなら、聞き手は服属[14] 的な姿勢で、話し手が自分に求めていた内的行為がどんなものかを推定することになるのだが、自分の世界理論を参照しながら積極的に話し手のプランや指図を再構成したとき、それが聞き手の内的領域においては「印象 Eindruck」として想起されることになるのだ。聞き手のこの内的経験営為は再帰的に彼の経験内容の一部となり、そこで得られた経験内容は、聞き手だった人が今度は話し手として言語定記を成す契機となり土台となる。ここでは、話し手は自分の言わんとしていることを刻印した言語定記を成すが、直接「言わんとしていることを」聞き手に「転送」しているのではない。また聞き手の得た印象は話し手に押し付けられたものではなく、与えられた言語定記から聞き手自身が作り出したものだ。つまり、話し手も聞き手も、媒介となる言葉をめぐって、同様に能動的な内的行為を行なっていることになる。

Ungeheuer の印象重視のコミュニケーションモデルを私はこのように解釈している。彼のモデルにおいては「表出」という事態が想定されていない。したがって何かが表出されたものとしての「表現」という用語を彼は敢えて避けているように見える。この点に、彼が Ausdruck や Äußerung を使わずに、Formulierung を常用している理由があると考えられる。また、コミュニケーションにおいて話し手と聞き手が内的行為として行なっていることは、自身の無定形な経

験の総体の一部に形を与える努力なのだから、その点にもこの語を選ぶ理由が見出せるだろう。

ところで、Ungeheuer のモデルでは、話し手と聞き手の内-外-二元関係は決して克服されないし、両者がそれぞれの個人的世界理論に照らして発話と理解を行なうのであるからコミュニケーションの成功は最終的には確認できない。これならコミュニケーションという事態は、各人が勝手に思うにまかせてしゃべっているだけのことになってしまいそうだ。しかし、そうならないために、このモデルではコミュニケーション参加者の協調的な姿勢が重要な意味を持つことになる。すなわち話し手と聞き手は相互の「疎通と理解」を行為目標として、相手の内的領域を推定しながら、一方で言語定記を成し、他方で言語定記に服属する。こうした「疎通と理解」を目指した参加者の協調的な姿勢があって初めて、コミュニケーション行為は社会行為として機能しうるのである。この点で、コミュニケーション行為は、個人が単独で行なう行為（例えば、考え事をするとか本を読むなどといった行為）と区別される。また外的行為として現われる上位の行為目標をもった社会行為とも区別される。言語コミュニケーションはそうした上位の社会行為の基礎を成すものと考えられている。したがって、Ungeheuer にとって言語コミュニケーションは、それ以外の社会行為へは還元できない、最小単位の社会行為ということになる。

6　以上のような見地から Ungeheuer は「文」がそれ自体として理解されることに、つまり言語学的な「文」の扱いに疑義を呈している。単文を考察の対象とするようなやり方を彼は「コミュニケーション外的な extrakommunikativ（Ungeheuer　1969 年、28 頁）」方法と批判的に呼んでいる[15] のだが、彼によると、ひとつの文は、コミュニケーション参加者たちが言語コミュニケーションによる努力を積み重ねることによってのみ、すなわち彼らの言語定記やそのパラフレーズが作り出すコンテクストの中でのみ理解可能な対象なのである。

> 言語による相互交渉を通して文の理解に到達するこうした作業、つまり、協調的な言語コミュニケーションにおいて理解に必要な思考[16] の合致を生み出すこうした作業は、あらゆる言語コミュニケーションの根底にある解釈学的な契機として捉えることができる。この契機と相関的に否定的な側面をなす事実は、あらゆる間人間的 zwischenmenschlich コミュニケーションシステム[17] は、言語コミュニケーションシステムも含めて、機能的には信頼できないということである。　（Ungeheuer　1969 年、30 頁）

すでに見たように、人間は内-外-二元関係と個人的世界理論という限界から逃れることはできないのだから、単文の一義的な理解、誰が見てもこう理解するだろうというような理解が、コード解読によって自動的に、あるいは直観的になされることはない。それは常に解釈の対象なのである。「すみませんが、通してもらえますかね」という文は、日本人なら即座に解釈し、その妥当性に関する問いすら浮かんでこないだろう。しかし、これは誰が誰に対して言ったのか、その人たちは何歳ぐらいの人なのか、女か男か、路上での台詞なのか百貨店の中でなのか、等々のことを少し考えただけで、最初にこれを見たときの理解はその一義性を失うだろう。

これに対しては、むしろこうした主観的な要素をすべて捨象したときに、言語それ自体の意味

が残るはずだという強硬な反論[18]が予想できる。だが、余計な（と観察者によってみなされる）要素をすべて捨象したとしても、語の連鎖と、それに関する観察者の個人的世界理論だけは捨象できない。つまりこの文に対する観察者の主観的な理解は捨て去ることができないだろう。実際のところは研究者が言語自体の意味に到達する可能性などないのだ。しかし「私」の理解として単文を分析するのではなく、そもそもが言語の特性を記述するという名目で分析するのだから、分析は客観的なものとして提示されることになるだろう。こうしたコミュニケーション外的な、文それ自体に対する理解というものを Ungeheuer は不十分なものだと考えているのだ。

上の例のように単文で挙げられたものに対して、そのコンテクストとなりうる付加的な要素を想定するだけで、単文それだけを見たときに得た理解はいくらでも変更されうる。このことは、文の理解はコミュニケーション行為においてのみ可能だという Ungeheuer の主張を根拠づけるものだ。「すみませんが、通してもらえますかね」は必ずしも「道を通す」という行為と結びつく必要はない。例えば、目の悪い初老の女性が、あるいは不器用な紳士が、自分ではうまく縫い針に糸を通せないので、そばにいる誰かにこう言って頼んでいるのかもしれない。コミュニケーション外的に取り出された単文に対する理解が「私の理解」であると認めることは、その単文が様々なコンテクストへ開かれていることを承認することである。逆に言うと、文に対する十分な理解を得るためには、コンテクストが特定されなくてはならないということである。したがって、文の理解ということを考える場合、「文と文は常に、たとえコミュニケーション外的にそれを耳にすることがあるとしても、コミュニケーション行為が行なわれる場面を通して束ねられているということをうやむやにしてはならない。コミュニケーション外的な場合は、記憶の中でそれらの文に対してコミュニケーション状況が想起されているのだ（Ungeheuer　1969 年、28 頁）」。

文の理解がコミュニケーション行為を要求するのであれば、文の理解という事態は、文そのものの理解にはとどまらないことになる。すなわち、コミュニケーション行為における聞き手の行為目標は「理解」であるが、しかし、それは言語定記自体を理解すること（つまり研究者がコンテクストから単文を取り出して施す、いわゆる「字義通りの意味」の理解）とはちがうのだ。言語コミュニケーションの行為目標は「文を理解することなのではなく、たとえ文の理解に媒介されているとしても、コミュニケーションしている人物を理解することなのである（Ungeheuer 1974 年、58 頁）」。文それ自体に関する理解は、Ungeheuer のコミュニケーション理論では、聞き手の行なう内的行為の一部にすぎないのであり、聞き手が理解しなくてはならないことの一部にすぎないのだ。

7　Ungeheuer は、人間学的な anthropologisch な立場から[19]コミュニケーション行為のありのままの姿を厳密に記述する努力を重ね、コミュニケーションは誤り易いもので、人間は相互理解を最終的に確認することはできないという、人間の素朴な期待や信念とは相容れないテーゼをもつに至った。彼は「コミュニケーション過程の問題を『単明で einfach』見通しのきくシステムや公式に解消して、その形で解決を図ろうとしていた人にはどの人に対しても、このテーゼを示して異議を唱えた（J.G.Juchem　1987 年、1 頁）」という。

彼が Chomsky や Searle を批判的に取り上げるのもこうした理由からである。例えば、言語

的創造性の原理に関する 1955 年から 1966 年に至る Chomsky の記述をいくつか比較して、「言語的創造性の原理に関する理解の仕方には、統語構造がひとつの言語からみて正しいか誤っているかを直観的に見分ける能力ということから、新しい内容のために新しい文を表明したり、その新しい文の内容をも直接的に理解する能力へ至る内容的な横滑りを、かなり明白に確認することができる（Ungeheuer 1969 年、24 頁）」と指摘し、文の理解に関する上で見たような彼の主張を述べながら、創造性の原理を（言語そのものに与えるのではなく）コミュニケーション参加者個人の特性として記述することを提案している。

Searle の思想は Ungeheuer のそれと、どちらかというと親近性をもつように見えるし、事実また Ungeheuer 自身、それが彼の「コミュニケーション意味論 Kommunikationssemantik」にとって重要な意味をもつことを認めもしている。Ungeheuer の批判は（それが Searle の主張の核心部分に対するものではないと断わりながらではあるけれど）、Searle が、意味しうることはなんでも述べることができるという「表現可能性の原理」を公準化して、話し手は「字義通りの発話」を為すことができるとしている点、さらに、字義通りの発話に関して、文の理解とは文の意味を知ることだという命題を立てながら、「両者があまりにも密接に結びついているように見えるので、『意味』を『理解』へ分析的に還元する可能性をまったく見ていない（Ungeheuer 1974 年、45 頁）」という点に向けられている。つまり Searle のテーゼはどこまでも話し手の側から見ただけの不十分なものだと Ungeheuer には見えるのだ。

どちらの批判にも共通している Ungeheuer の姿勢は、Chomsky や Searle が、（言語的創造性の原理に伴って使用される用語である）母国語のマスターとか流暢さ、あるいは表現可能性の原理などの公準を盾に捨象している、考察対象になりえない、規格外だとされる人間の言語定記、つまり、あいまいだったり、多義的だったり、中途半端だったり、文法的に間違っていたり、どもっていたり、冗長すぎるといった人間の言語定記を、現実生活においてはそれがごく普通に見られる、いやむしろ優勢なものだとし、それをコミュニケーション内的に分析することの意義を、システムや公式に基づくコミュニケーション外的な考察よりも、重視するというものである。

8　素朴な経験的知識はそれだけでは学問的な用をなさない、つまり「仮説的な理論構想なくしては経験的検証はありえない（Ungeheuer 1969 年、25 頁）」という立場の研究者からは擬似経験論 Empirizismus の謗りを受けるだろうと言いながら、Ungeheuer は、経験的な理論の根底にある公準や公理と呼ばれる、研究者が（陰に陽に）措定している基本的な仮定を、自らの経験に基づいて検証する姿勢を変えようとはしない。それは理論の土台を確かめるやり方だ。経験的理論の根底にある研究者自身の「前-判断 Vor-Urteil」を検証することである。

Ungeheuer は 20 世紀に登場した「普遍的、超個人的な叙述の可能性を保障しようという意図をすでにもっていた（Ungeheuer 1987 年、298 頁）」ふたつの対照的な研究方法のタイプとして行動主義と現象学を挙げて批判的なコメントを附している。彼に言わせると、経験科学の第一記述 Erstbeschreibungen は研究者の経験の現象記述であり、これは研究者の前-判断に拘束されている。前-判断として第一記述の中に与えられた研究者の経験内容は、その研究者が構築する理論によって説明されることになる対象であると同時に、彼の理論を根拠づけるものでもある

のだ。それが公理や公準として記述されようとも事情は同じである。Ungeheuer が超個人的な装いに疑問を呈するのも、また擬似経験論と言われるかもしれない検討の仕方をするのも、こういう理由からである。このとき、彼は、当該の言語定記を為している研究者の前-判断としての個人的世界理論を推定し、それに関して自身の前-判断を剥き出しにして言語定記を為しているのである。彼は自分で構想しているコミュニケーションモデルに則った形で、研究者たちとのコミュニケーションを実践しているのだ。

9　コミュニケーションが、Ungeheuer の言うように、その成立を最終的には確認できないというなら、コミュニケーションは無意味な行為ということになるのではないだろうか？　この素朴だが、当然浮かんでくる疑問に対してはこんなふうに答えることができるだろう。すなわち、自分の伝達したいことをありのまま相手に伝えることができた（ことを確認できた）という事態をコミュニケーションの成功と呼ぶのであれば、そして、一般的にコミュニケーションは必ず成功するというのであれば、私たちは改めて誰かとコミュニケーションする必要はないだろう、と。なぜなら、私の中にある事柄がそのまま私以外に人間に伝わるためには、それと全く同じ事柄が私の相手の内部にも存在していなくてはならないからだ。つまりその人は私自身と同じ内的世界を持っていなくてはならないということだ。ならば、その人と会話するということは、私自身と会話することと同じことだろう。とすると逆に、私は私自身との対話することによって、この世のすべての他者のことが分かることにもなるだろう。コミュニケーションは成功するという見解、つまり情報の転送理論的なコミュニケーション観の背後には、コミュニケーション行為を行なう万人が同じ性質の存在であるという前提が潜んでいる。

人間は、個人的世界理論の外に出ることができず、内-外-二元関係を克服することのできないので、コミュニケーションする必要に迫られる。しかし、コミュニケーションと呼ばれる行為を行なうことができる（つまり、人間にはそれを可能にする能力が備わっている）ということは、決してその成功まで保証しているのではない。ところが、コミュニケーションという語を使っている言説（日常の会話、テレビ番組でのコメント、新聞記事、研究者の書いた物等々）はほとんどの場合、明言するかどうかは別として、コミュニケーションの成功を前提としている。まるでコミュニケーションの成功が確認できないと困るかのような印象を受ける。しかし、コミュニケーションが成功しなければ困ると感じるのは、特定の価値なり規範なりを固定的に持続させたいと考えている人々ではないだろうか、と私は思う。そういう人々はとかく、自分の言い分が理解されないとか、言葉が通じないなどと言ってコミュニケーションの不成立を嘆くのであるが、彼らのため息はしかし、話し手の役割に立った場合の相手を服属させたいという欲求が満たされないことのサインである。このとき、自分が個人的世界理論と個人的コミュニケーション理論に基づいていることに無自覚な人間は、得てして超個人的な価値や規範を盾に取ろうとする。自分には普遍的に妥当する真理が分かっているという身振りを伴うこうした態度は、通俗的な悪しきプラトニズムとしか言いようがない。それは、プラトンが対話の中にこそ真理に到達しうる契機があると考えていたのとは正反対の事態を招くからだ。通俗的な悪しきプラトニズムは対話を打ち切ってしまう。コミュニケーションは成功するはずのもので、話し手として自分は真理を語って

いるという前提に立つ場合、伝達内容が聞き手の同意を得ようが得まいが、コミュニケーションは終わってしまうだろう。聞き手の同意が得られる場合は、聞き手がその同意を示した時点でコミュニケーションを続ける必要はなくなる（だから、自らの立場や既得権、権力を守るという行為目的をもつ話し手は、聞き手が同意しやすい文言を敢えて重ねる努力を行なう）し、同意が得られない場合は、同意しない聞き手の存在から自分の信じていた価値や規範に普遍妥当性のないことを自覚しない限り、話し手としてはそれ以上もはや手の打ちようはないのである。

コミュニケーションの実践的な有効性は、したがって、それを、*希望をもたずに*、絶えず続けていくことにあると言えるだろう。それによって、人間が均質な存在であるという不毛な期待と信念を絶えず揺るがすことができるだろうから。

注

1 Gerold Ungeheuer の経歴、業績、思想のアウトラインなどは、**KOLOSS**（**Ko**mmunikations-wissenschaftliches **L**ern-**O**nline-**S**oftware-**S**ystem）によってインターネット上で（K.Bühler、N.Luhmann、G.H.Mead、J.R.Searle らと共に）紹介されている。
KOLOSS の URL は http://www.kowi.uni-essen.de/koloss/ 。

2 Ausdruck と Eindruck の訳語に関しては、本論第５節を参照。

3 人間は絶えず何かを経験しており、この「何か」に相当するものが経験内容である。ある人物Ａを異なる時間と場所で二度見た場合、それはふたつの異なる経験営為ではあるが、Ａを同一人物として見るという経験をしているのだから、その点では同一の事柄を反復して経験したことになる。こうした同一の経験内容の反復を経験することで、人間は（自分の経験内容が作り出した世界像としてではなく）自分の外部に事物や出来事、世界が存在しているという確信を抱くのだと Ungeheuer は言う。

4 複数の人間が場所、時間、数に関して同定された同一の対象に関して、外的経験として同じ経験営為を行なっている場合であっても、そのことは経験内容の同一性の根拠にはならない。当事者間での経験内容の同一性は、さもあるべきこととして各個人の中で信じられている仮定にすぎない。

5 人間が何かを経験するとき、その何かはありのままに経験されているのではなく、必ずその人の先入観 Vorurteil（あるいは前-判断 Vor-Urteil）に基づいて経験されている。また逆に、すでにある経験内容も新たに流れ込んでくる経験の影響を受けるので、人間の経験の総体は内的な整合性を保ちながらも絶えず変化にさらされている。人間の内的領域におけるこの過程が、研究者の理論構築の過程と同じであると Ungeheuer は見ている。

6 個人的世界理論を記述するにあたって、Ungeheuer はそれを「容器と内容物」や「所有者と所有物」といった比喩では説明できないと言っている。「私」の中に個人的世界理論が詰まっているのでもなく、「私」が個人的世界理論を所有しているのでもない。つまり「私」は個人的世界理論を操る「主体 Subjekt」としてどこか別の所にいるのではなく、この経験の総体である個人的世界理論それ自体が「私」に他ならないというのである。

7 囲圧的経験と所求的経験との区別は、望ましくない経験と望ましい経験という意味合いでなされているのでは決してない。コミュニケーション行為を記述するにあたって Ungeheuer にとって重要なのは、

経験に先立つ「意図」があるかないかという点だけである。

8　Interaktion の訳語としては「相互作用」あるいは「相互行為」という表現が広く用いられているが、心理学や社会学などで使用される文脈とのちがいを考慮して、また Ungeheuer の考え方にはこの方がよりふさわしく見えるので、ここでは敢えて（試みとして）「相互交渉」という訳語を採っている。

9　コミュニケーションの比喩としては Veranstaltungen という表現は分かりやすいものとは言えない。これは Ungeheuer が「コミュニケーションにおける服属 kommunikative Subjektion」と呼んでいる、コミュニケーション行為での話し手主導の非対称性を念頭においての比喩だと思われる。コミュニケーションを成功させようというのであれば、聞き手は話し手の言語定記によってなされる指図に従属する必要があり、その意味で話し手と聞き手は非対称的な関係にあると彼は主張する（「服属」に関しては、Ungeheuer　1987 年、316-319 頁参照）。

10　「すみませんが、通してもらえますかね」という発言に（コミュニケーションの表現重視のモデルが前提しているような）情報や知識が含まれていると、Ungeheuer は考えない。この発言に限らず、一般に語のどれもが聞き手に対する、文法的な水準での理解も含めての「プラン」や「指図」なのである。

11　Ungeheuer は話し手の発言を（Ausdruck や Äußerung ではなく）一貫して Forumlierung という用語で表わしている。本論ではこの用語についても Ungeheuer の意図を推察して「定記」という訳語を試みている。これに関しては、本論第 5 節も参照。

12　コミュニケーション目標の達成を信じさせてくれる安心材料として、Ungeheuer は、「より上位の社会行為の行為目標の達成」の他に、「社会-知覚的コンタクト（コミュニケーションパートナーに対して抱く好悪の気分や感情）」「コミュニケーション行動を制御する文化的要因（コミュニケーション行動に関する個人的な理論において他者との共有可能性が仮定されている規準）」が作用していると言う。（この点に関しては、Ungeheuer　1987 年、321-24 頁参照）

13　意味の共有が可能か否かという問題、つまりコミュニケーションの成立の確認が可能か否かという問題は、ある点では可能だがある点では不可能だなどといった中間的な答えを許さないだろう。この中間的な打開策を模索した典型例としては『コトバの＜意味づけ論＞』（深谷昌弘・田中茂範、紀伊国屋書店、1996 年）を参照。またそれに対する批判としては拙論「意味の所在と理解の意味」（独語独文学科研究年報、第 26 号 50-67 頁）を参照。

14　注 9 参照。

15　「誤解のないよう言っておくと、『コミュニケーション』という現象に関する理論的な取り組みは、どうしてもメタレベルから行なわざるをえないので、狭い意味では常にコミュニケーション外的である。しかし、一義的に記述可能なシステムであるかのようにこの現象と向かい合うのか、それとも、それを絶えず変化する過程として捉えるのか、このどちらを採るかで観察方法は異なる。（中略）後者をコミュニケーション内的な kommunikativ 観察方法と呼ぶことができるだろう。そしてこの観察方法のちがいは、観察対象に関して言うなら、言語 Sprache と発話 Sprechen のどちらを対象とするのかという区別へと行き着くことになる。」（J.G.Juchem　1987 年、4 頁）

16　思考 Gedanke とは、あるゆる形式の心的内容をカバーする語として使用されている。

17　Ungeheuer が「コミュニケーションシステム」と言うときの「システム」とは、（J.G.Juchem の解説によると）「言うまでもなく、厳密に定義された構造という意味でのシステムとは関係のないもので、それはコミュニケーション現象がもつ疑いようのない規則性 Regelhaftigkeit を表現しているのにすぎ

ない。そして、この規則性はそれ自体修正可能なものだし、またそういうものでなくてはならない。」（J.G.Juchem　1987年、3頁）

18　ここで、一義的な理解に対する疑義は、別言するなら、言語的な意味とか字義通りの意味に対する疑義である。しかしそれを認めないなら、いったい何が言えるのかという反論が起こるだろう。例えば「すみませんが、通してもらえますかね」という文の字義通りの意味が前提されなければ、そもそもが話し手の指示やプランを聞き手が理解することはできないというわけだ。あるいは手料理をご馳走してくれた人に皮肉のつもりで「ほんと、おいしいよ」と言っても、聞き手がこれを皮肉と解するには字義通りの意味を最初に理解していなくてはならない。いずれにせよ、文の理解は話し手の意図を理解することだという主張は、暗に（自分で否定している）字義通りの意味を前提にしなくては為されえないのだから、その主張は循環論でしかない。こんな反論に対しては、こう返せるだろう。どちらの例にせよ、話し手も聞き手も自分でその語の連鎖に意味を与えているのだ、と。だから話し手と聞き手が同一の字義通りの意味を共有していると想定する必要はないのだ。話し手が自分の言語経験から何かの定記を成す。聞き手は与えられた言語定記を自分の言語経験に照らして理解する。Ungeheuer が強調しているのは、このとき両者が双方の個人的世界理論を検証する方法は存在しないという点である。この二人には双方の間に一致があると信じることしかできないということだ。したがって、字義通りの意味があたかも文自体に備わっているかに見えるのは、その文の観察者が自分の言語経験に照らして、自分の理解の仕方は他の人にも想定できそうだと思い込んでいるからにすぎない。最大公約数的な理解の仕方があるという彼の信念が、字義通りの意味という実体にすり替えられているわけだ。誤解のないように繰り返しておくと、字義通りの意味を否定して、意味は個人が構成するものだと考えることは、人間と人間の間の一致の可能性を否定することではないのだ。一致を検証する可能性が原理的に否定されているのだ。

19　「コミュニケーション理論に取り組むとき、私は人類学的なアプローチを選ぶ傾向がある。それは、科学、哲学、そして日常生活が吹き込むイデオロギーのすべてから私を遠ざけてくれるのだ。そういう立場を見つけることができるかどうかは、知的な強靭さにというよりは、自分が知識としてもっている先入観を分析できる力にかかっている。こういう分析を行なえば、どんな先入観がイデオロギーとして吹き込まれているか、またその他に経験内容ではそもそも何が残っているのかということも明らかにされうるかもしれないだろう。」（Ungeheuer　1987年、336頁）

参考文献

Lenke, N. / Lutz, H.-D. / Sprenger, M. : *Grundlagen sprachlicher Kommunikation.* München : W. Fink Verl.　1995.

Ungeheuer, Gerold : „Zum Prinzip der sprachlichen Kreativität“ (1969)　S.18-33

Ungeheuer, Gerold : „Was heißt ‚Verständigung durch Sprechen‘ ?“ (1974)　S.34-69

Ungeheuer, Gerold : „Vor-Urteile über Sprechen, Mitteilen, Verstehen“ (1987)　S.290-338

Ungeheuer の論文はいずれも次の論文集に所収のもの。なお、J.G.Juchem の引用は Einleitung (S.1-17) からのもの。

Kommunikationstheoretische Schriften I : Sprechen, Mitteilen, Verstehen. (Hrsg. von Juchem, J.-G.)　Aachen : Alano Verl.　1987.

（ドイツ語非常勤講師）